

## 学科などの特性に応じた学校評価手法の開発

香川県立坂出工業高等学校 教頭 藤沢 英治

### 1. はじめに

本校は、平成19年、20年度の2年間、文部科学省より学校評価についての研究指定を受けている。香川県教育委員会が主催する「新時代に対応した高等学校教育改革推進協議会」の指導を仰ぎながら、「学科などの特性に応じた学校評価手法の開発」を実践研究課題として、学校を挙げて研究に取り組んでいる。

### 2. 本校の特色

全日制は、昭和13年に創立され「誠実・創意・協調」の校訓のもと、数多くの優秀な技術者を養成し、実社会へ送り出してきた。機械（機械コース・自動車コース）、電気、建築、化学工学の4学科があり、「ものづくりによる人づくり」を教育の中心として、教員と生徒が一緒になって実験や実習などに熱心に取り組んでいる。生徒は、就職志向が比較的強く、約3分の2が卒業後地元企業を中心に社会へ巣立って

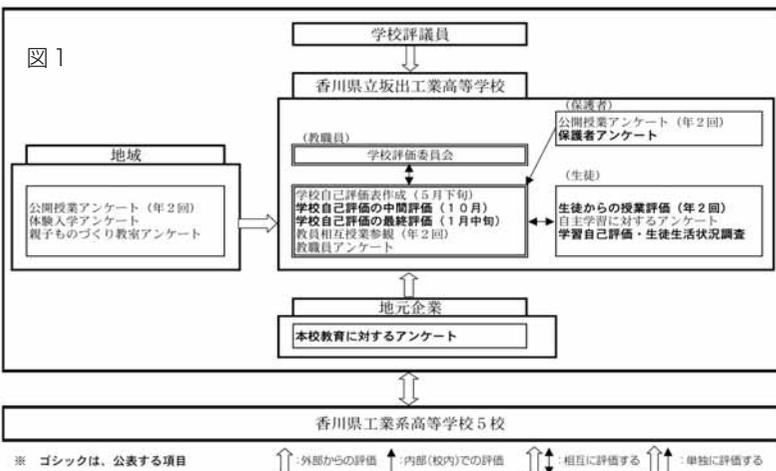
いる。

一方、大学への進学希望者には、3年次に数学や英語等の指導に重点を置いた教育課程を組む進学コースを設置している。専門分野では、最先端技術のロボット製作、インターネットを中心としたコンピュータ活用技術やエコデカンカーなど、多様なものづくりに取り組み、コンテストや各種競技大会に向けて技術の向上に取り組んでいる。さらに「きらめくかがわの高校づくり推進事業」として、「親子ものづくり教室」を開催したり地域のボランティア活動を実施するなど、地域貢献に努めている。

定時制は昭和23年に開設され、機械、電気の2学科がある。17時30分から4時限の授業を行い、各生徒の理解度に合わせた家庭的な雰囲気の中で楽しく学習に取り組んでいる。

### 3. 研究の概要

(1) 本校の学校評価システム（図1参照）



平成15年度から学校自己評価表を作成し、校務運営の評価を始め、16年度から校務分掌に学校評価委員会を、さらに、外部の人からなる学校評議員会を設置し、組織的に改善に努めてきた。学校評議員会は、学校の教育活動、地域社会や家庭と学校との連携、その他

20年度重点目標		具 体 的 目 標
1	確かな学力の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の学ぶ意欲を高め学習習慣の定着を図るとともに、学力向上を目指した授業を行うため、授業評価や教員相互の授業参観を通して指導内容の改善や現職教育の充実を図る。</li> <li>・ものづくり教育を充実させ、各種ロボット競技大会に積極的に参加するなど、工業の実践力の育成に努める。</li> <li>・計画的な資格取得指導を徹底し、個に応じた指導の実践に努める。</li> </ul>
2	進路指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・就職率100%を維持するとともに、インターンシップやデュアルシステム、応募前の職場見学会等を積極的に活用し、望ましい職業観・勤労観を育成する。</li> <li>・将来社会人として「社会的自立」のできる態度や能力を育てるためのキャリア教育を実践する。</li> <li>・大学進学への希望者増加を踏まえ、習熟度別学習の充実に努めるとともに、高大連携を推進し、より以上に国公立大学受験希望者に対応できる教育システムを確立する。</li> </ul>
3	豊かな心の育成	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活指導や部活動を充実させることにより、基本的倫理観、社会的マナー、協調性、自律心の育成に努める。</li> <li>・家庭や関係機関との連携を密にし、教育相談や人権教育を充実させる事により、人格・人権を尊重し他人を思いやる心の教育の充実に努める。</li> </ul>
4	信頼される学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開かれた学校づくりを目指し、学校評価結果に基づき、組織として適切かつ早期の対応に努めるとともに、学校情報の提供を十分に行う。</li> <li>・ものづくりの技術を活かして地域に貢献したりイベントに参加するなど、より一層地域社会との連携や相互理解に努める。</li> <li>・施設・設備および危機管理を充実させ、校内での事故や交通事故の未然防止に努める。</li> </ul>

表1 年度重点目標および具体的目標

学校が意見を求める事項などについて協議する場として年3回開き、学校関係者評価をお願いしてきた。

## (2) 実践研究の視点・方針

学校全体を評価する学校自己評価表の重点目標を、19年度からは、香川県教育基本計画に示す理念や項目に照らし合わせ、「確かな学力の育成」、「進路指導の充実」、「豊かな心の育成」、「信頼される学校づくり」の4項目とし、学校運営全般を見通す目標とした。(表1参照)

また、この度の研究テーマである「学科などの特性に応じた評価」としては、多数の生徒が地元坂出市等近隣にある臨海工業団地や高松市の県内企業に就職することから、「地域のニーズに応える専門学科工業としての教育の在り方」を探る方向を目指し、本校生全員が2年次または3年次に参加するインターンシップ実施企業からの評価を積極的に導入することとした。

## (3) 評価体制

学校評価委員会において研究を推進している。学校評価委員会は、校長、教頭(全・定)、事務部長、主要校務分掌主任、専門学科主任の18名で組織されている。

また、学校評議員には、学校関係者評価委員を兼ねることを目的とし、19年度から市教育委員会教育委員長、高専校長、企業人事担当2名、地域代表、の5名に委嘱し、学校の取組評価をさらに網羅できる構成とした。

## (4) 研究方針

### ① 自己評価・外部アンケート

#### ア 自己評価

これまでの実践を踏まえ、各校務分掌や教科・学科からの評価項目を各1～3項目に絞り重点化を図り、年度始めに具体的目標、方策を出し、学校自己評価表として一覧表にまとめた。年度末には外部アンケートや教職員アンケートの結果、各分掌等の取組など、実施結果と判断の根拠を記述した。各分掌等自らが、A:「達成」～D:「未達成」の4段階の基準で評価を行った。評価にあたっては、具体的目標・根拠を明示し、客観化を図った。さらに次年度改善案も記入し、報告書としてまとめた。

#### イ 外部アンケート

従来から実施していた「公開授業アンケート」、「生徒からの授業評価」、「生活状況調査・学習自己評価」、「保護者アンケート」の他に、19年度からは、本校と地域の企業との連

携を一層深める手立てとして「インターンシップ実施企業からのアンケート」を加えた。

## ② 学校関係者評価

年度末に、学校自己評価表を「PTA評議員会」及び「学校評議員会」に提出し、審査を受けた。また、学校評議員には、学校評価記録用紙で評価記録を提出していただき、最終の学校関係者評価とした。

## ③ 学校（工業高校）間評価

県下工業系高校6校間で情報を共有し、相互評価を実施することで、お互いの連携を深め、自校の改善に活かす目的で学校間評価を実施している。各校が自己評価表等を用いて説明し、意見交換、評価票による相互評価を行った。

# 4. 研究の結果

## (1) 学校自己評価表

学校自己評価表内に「具体的結果・根拠」を表示する欄を設け、自己評価結果A～Dが妥当かどうかを外部の方が見ても判断できるように従来の評価表を改善した。また、20年度においては、公開用学校自己評価表のみに絞って評価を実施した。9月までの取組を中間評価として評価表にまとめ、前年度との比較・検証を行い、11月の学校評議員会での審議を経て、改善を図った後、1月に最終評価を行った。前年度、また中間評価との比較・検証を行うことで、改善点の絞り込みが容易になった。

## (2) 外部アンケート

ここでは特に『インターンシップ実施企業からのアンケート』を取り上げる。

19年度は、インターンシップを実施している近隣の企業48社にアンケートを依頼した。44社から回答をいただき、生徒の「あいさつや態度」、「素直さ」は良好との結果を得た。「学ぶ意欲」は普通との評価が最も多く、生徒に積極性が足りない現状がわかる。企業が高校生に求めるものは、「積極性」、「コミュニケーション能力」、「協調性」、「礼儀作法」で、豊かな人

- 1 生徒の挨拶や態度はどうか？
- 2 生徒の服装・身だしなみはどうか？
- 3 生徒の素直さはどうか？
- 4 生徒の学ぶ意欲はどうか？

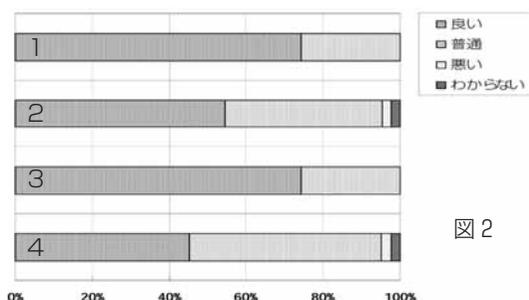


図2

間性を育成する教育が求められている。(図2参照)

20年度は、企業48社に前年度アンケート結果をフィードバックした。多くの企業から、「生徒の実態や各企業の要請が把握できるので、このようなアンケートのまとめを定期的を実施し、情報提供してほしい」との要望があった。

## (3) 学校関係者評価

20年2月に開催された第3回学校関係者評価委員会に、学校自己評価表を提出して評価をいただいた。委員から、評価全体に「自らを厳しく評価しているので、もう少し良い評価にしてもよいのではないか」との意見もあった。アンケート集計結果などについては、「適切に比較分析しているが、具体的な施策の提案までには



図3 本校学校評議員

至っていない」など、本校の問題点を的確に指摘いただいております、工業高校としての在り方を検討する上で参考になった。

#### (4) 学校間評価

19年度は、1月の工業系生徒成果発表会の後に学校間評価を実施した。各校が自己評価表等を用いて説明し、質疑応答を行ったが、初年度ということもあり、お互いの情報交換が中心であった。20年度は、19年度の実施方法に加えて、評価票を用いての相互評価を実施した。自己評価表での自校の評価、説明等に基づき、他校から各評価項目について自由記述形式での評価を行った。

### 5. 成果と課題

#### (1) 成果

① さまざまなアンケート調査で本校の教育実施状況の大部分は把握できた。控え目な性向の多い生徒の生活や態度について、「礼儀正しく、挨拶をよくする」という評価をいただいた。本校生の良い特徴として今後も継続して伸ばしていきたい。一方、学習面では「家庭学習の時間が少ない」結果を受け、「自主学習の時間」を新たに設けてみた。まだ学習時間増加には至っていないとはいえ、生徒の学習に対する意識は徐々に高まってきている。

② 学校自己評価表をホームページに掲載するにあたって、内容を公開用に編集しなおした。公表を意識して自己評価表の再編集を実施することにより、学校全体を見通した評価項目に統一できたため、分掌別のつながりがない部分が見えるとともに、校内の分掌を超えた問題点の共通認識ができた。

③ 工業高校に関する安全管理体制は、普通科高校等よりはるかに厳しく細かい基準を設ける必要がある。19年度までやや意識が薄かったこれらについて、20年度の学校自己評価表に位置づけ、重点項目として取り組んだ結果、教員の実習等における安全に対する意識が高められた。

④ 19年度から始めた「インターンシップ実施企業からのアンケート」では、本校への単なる評価ではなく、本校教育活動に対して協力いただける内容も尋ねている。それは、本校と地域の企業との連携を一層深める手立てとなっていくものとして、地域産業を支えるスペシャリスト育成の使命を持つ本校にとり、今後続くニーズの理解と連携の相乗効果が期待できる。

⑤ 評価票を用いて学校間評価を実施した結果、他の学校の普段見えない部分がより鮮明になり、良い活動や試みを各校の特色や実情に合わせてお互いに採り入れ改善を図るという共通認識、方向性が得られた。

#### (2) 課題

① 学校評価の研究指定を受けたこともあり、たくさんのアンケート調査を実施したが、そのデータを集計し結果をまとめる作業に追われてしまった。また、学校評価委員会でも結果説明を行うことに時間がとられ、校務運営改善のための協議の場を十分に確保できなかった。今後は改善に重点を置いて取り組んでいきたい。

② 20年度は公表用に絞って自己評価表を作成し、評価項目を大幅に削減して各科・各分掌毎に1～3項目とした。今後、各分掌内の重要な評価内容を見逃さないように配慮しながら、工業高校としての特色を活かした評価項目を更に精選していく必要がある。

### 6. おわりに

平成19、20年度の2年間さまざまなアンケート調査等の結果を検証し、学校評価を行ってきた。学校評価は、成果をその後に活かし、課題を改善につなげるのが本来の目的であり、評価のための評価に終わってはいけぬ。このたび得られた成果と課題を基に本校教育の更なる改善を図るとともに、工業高校として、地元企業や地域住民、他の工業高校と発展的な協働関係を築きながら、進化する学校評価を目指して今後も研究と実践を続けていきたい。